銀賞

『窓ぎわの友達』

『窓ぎわの友達』

京都府　同志社女子高等学校三年　柿沼希実

心がぞわぞわする。こんなにも人の頭の中をのぞきたいと思ったことがあっただろうか。いや、ない！

ぼくは翔太。三ツ橋小学校の三年生。母ちゃんや父ちゃん、親友の豪や広志をはじめとしたたくさんの人と楽しい毎日を過ごしている。

しかし、そんなぼくにはとても大きななやみがあるのだ。

「おはよ！」

教室のドアを力任せに開け、バァン！　と大きな音を立てたドアにクラスメイトは驚きの声を上げた後、「翔太、おはよう！」とぼくに笑顔を向ける。

晴れやかな気持ちで席についてランドセルをテキトーに床に放ると、となりでしんけんに本を読んでいるユウが目に入った。

「ユウ！　おはよ！」

ぼくは元気よくあいさつをした。

「……」

しかし、ユウはこちらをチラッと見やっただけで、またすぐに本の世界へ帰ってしまった。

（今日もあいさつなしかぁ……。）

さっきまでの晴れやかな気持ちがたちまちしぼんでいく。
ユウはすごく静かな子だ。というかしゃべっているところを見たことがないのでぼくのあいさつに応えないのは当然のことだ。初めこそ気にならなかったが、彼と席がとなりになって一週間も経つとさすがに不思議に思うのだ。
うーん……やっぱり嫌われているのか……。でも何かしたわけでもないしなぁ……。
こうして彼はぼくのなやみのたねとなったのである。
一時間目のチャイムが鳴る。ぼくのクラスは算数だ。おせじにもできがいいとは言えないぼくからすると、体育以外はまさに、すいみんの時間だ。
「今日はこの前のテストを返すぞー」
げっ、まずいぞ!? 思わず顔がひきつり、せなかに冷や汗がつたう。どうやらまずいのはぼくだけではないようで、豪も同じような顔をしていた。
すっかり忘れていたが、三日前にぼくらはテストを受けた。一応前日にべんきょうはした。五分だけだけど。しかし、豪は三分と言っていたから最下位ではない。……多分。
そんなことを考えているうちに先生が僕を呼んだ。
「翔太――」
ああ、かみさま! どうかぼくに三十点を! あわよくば豪よりいい点をください!
(二十八点……。)
おしい。あと二点あればぼくの中では百点だったのに! まあおしいとは言っても、まちがいなく母ちゃんに

怒られる点数だ。さて、どうしようか……。
「おい、翔太！　なん点だった？」
必死に言いわけを考えていると、豪が血相を変えてこっちに来た。二十八点、と答えると彼はこの世の終わりのような顔になった。
「豪は何点なんだ？」
「十九……」
よし。最下位ではない！　やった！　これは言いわけに使えるぞ。
「二分の差がでたな。はっはっはっ」
ぼくが調子にのっていると、後ろにいた広志から「二十八点も十九点も同じだよ、二人ともちゃんと勉強しなよ」と冷静な一言が飛んできてげきちんした。
二人仲良く再テストが決まったところで、ようやく席に着く。なんとなくとなりを見ると、ユウは百点のテストをランドセルにしまっていた。へえ、百点か、なるほど……。
「へっ!?　百点!?」
再テストのぼくは驚きのあまり思わず心の声がもれてしまったらしい。しまった！　と思ったけどもうおそい。ギョッとしたような顔でこちらを見つめるおとなりさんになんと言いわけすればいいのか思いうかばなかった。あせったぼくの口から言葉が飛び出す。
「すごいな！　百点って！　天才じゃん！」
ヤバイ！　まずは点数をぬすみ見てしまったことをあやまるべきだったのに！　出だしから失敗してしまい、

本日二度目の冷たい汗が流れる。
たいへんなことになった。相手はおはようのあいさつさえ返してくれないなぞの天才だ。どんなことを言われるのだろう、はたまた無視されるだろうかとぼくは身構えた。しかし、ユウは耳をすまさなければ聞こえないような声でこう言った。
「えっと……ありがとう……」
案外ふつうの言葉が返ってきてぼくはびっくりした。それと同じくらい、ユウとの初めての会話がうれしくてぼくは続けた。
「やっぱりべんきょういっぱいしないと百点とれないよな?」
「あ、えっと……人によると……思う。ぼくはじゅくに行ってるから……」
「じゅくか……。なるほどなぁ……」
ほのぼのとした会話はしばらく続いたが、先生の声によって打ち切られた。しかし、ユウと初めて話せたことがうれしかったので、ぼくはめずらしくまじめに授業を受けたのだった。
「母ちゃん、ただいまー!」
おかえりなさい、と母ちゃんがリビングから顔を出す。そのままリビングでおやつを食べようとしたが、続く母ちゃんの一言で計画が消えることになる。
「なにか母ちゃんにわたすものない? お手紙とかテストとか」
しまった! ユウとの初会話がうれしくて言いわけを考えるのをすっかり忘れてしまっていた。ぼくはとっさにごまかそうとしたが、母ちゃんには見ぬかれてしまったらしい。

「翔太、正直に出しなさい」
どうやらぼくはおやつにありつけないようだった。
結果として、二十八点のテストは母ちゃんをとても怒らせた。いつも父ちゃんが助けてくれるのだが、それも今回は通じなかった。
ぼくはテストで六十点を取るまでゲーム禁止になってしまった。
おちこむぼくを見かねた父ちゃんは「男は禁止されるとやりたくなるよな！」となぐさめにならないなぐさめをくれたのだった。
翌日。ぼくは相当ひどい顔をしているらしい。豪と広志がそろってびっくりするほどには。
「ハァ～……」
だめだ。口を開くとため息しか出てこない。
「元気出せって。次のテストで六十点とれば遊びほうだいなんだろ？」
「そうだよ、少しの間まじめにべんきょうしたらいいだけじゃないか」
「それがキツいんだって……」
べつにがまんするのはいい。でも好きじゃないことをがんばるのがいやなんだ！
完全にいじけているぼくを無視してチャイムが鳴って二人は席に戻っていった。となりからひかえめな視線を感じたが、今のぼくにはそれに反応できる余裕はなかった。
人は気がのらないと好きなことでさえやる気が起きない。きらいなことならなおさらだ。そう自分に言いわけをして一時間目、二時間目はねた。そして三時間目の算数。しかし、三時間目にもなるとあれだけいじけていた

気持ちも落ち着いてきた。
（いじけてもゲームはできないもんな……。）
よし。まじめに受けるぞ！　そう決意して先生から配られたプリントと向き合うが。
う～～～ん！　さっぱりわかんない！
割り算ってなんだ。そもそもどうやって解けばいいのだろうか。
このまま考えていてもムダだ。あきらめて答えをうつしてあとで考えよう。そう思ったその時ユウから声がかけられた。
「あの……もしかして解き方が分からないの？」
「えっ、あ、うん。さっぱり分かんなくて困ってるんだ。次のテストがんばらないとだめなんだけど」
「たしか、六十点とるまでゲーム禁止……だったよね。えっと、それなら次のテストでとれると思……」
「えっマジで!?」
思わず言葉をとめてしまった。ユウはびっくりして小さく「ヒッ……」とかたをゆらせた。でもぼくはかまわずつづけた。
「たのむ！　いつでもいいから次のテストまでぼくに算数おしえて！」
昨日まで話しかけても何も返事がなかった相手に算数を教えてもらっていることを過去のぼくが知ったらどんな反応をするだろうか。
「えっと……まずどこが分からないの？」
「全部だ！」

「ぜっ……全部!?」
「うん！　さっぱり分かんねーや！」
　むねをはって答えるとついてきた広志に、
「自信満々に答える所じゃないでしょ」
と言われてぼくはすねた。ちなみに豪もなぜか一緒におしえてもらうことになった。
　しばらくプリントに目を落とし、なにかを考えていたユウが顔をあげた。
「あの、少し聞きにくいんだけど……」
「おう！　なんだよ、なんでも答えるぜ！」
　申し訳なさそうなユウとは反対にキラキラした笑顔の豪が言った。
「二人とも、九九は全部言える……？」
　ぼくと豪は顔を見合わせた。どうやら思うことは同じらしい。
「九九ってなに？」
　どうやらぼくらは本当にきそから分かっていなかったらしい。あの後からテストまで、ユウだけではなく、広志までぼくらに教え始めたから。
　ユウの教え方はとても分かりやすくて、ぼくも豪もなんとか六十点をこえることができた。ゲームきんしは取り消された。ユウにはかんしゃしてもしきれなかった。
　テストが返された翌日、ぼくは改めてユウにお礼を言った。
「この前はほんっとうに、ありがとな！　母ちゃん見せたらびっくりしすぎてカンニングまでうたがわれた」

「そっか！　それはよかったね！　でも次もちゃんとやらないとだめだよ」
「うっ……。分かってるって……」
　ユウはこのべんきょう会を通し、ぼくらに対してはよくしゃべるようになった。でも、友だち、というにはなにかちがう。うすいカーテンがぼくらを仕切っているような……そんな感じ。
　まあそれはさておき。
「なあ、ユウ、なんかしてほしいこととかある？」
「えっ……急にどうしたの？」
「ずっとおしえてくれてたから。なんかしたいなって思って。やりたいこととかない？」
　ああ……。と小さくつぶやいてうつむいた彼はこの前ぼくと豪に九九を全部言えるのかを聞いた時よりも言いづらそうにしていた。
　お、これはなんかあるな!?　そう思ったぼくはもうひと押ししてみた。
「言ってみなきゃ分かんないだろ？　言ってみ！」
「えっと……実は、夜の光川丘（ひかりがわおか）に星を見に行きたいんだ」
「おお！　あそこか！　行く？」
　光川丘はこの地域のはずれにある小さな丘だ。丘のてっぺんからは町全体が見渡せる。でもてっぺんまでの道のりが結構たいへんで、夜は子どもだけでの立ち入りはあぶないから禁止されている。
　ユウは断られると思っていたらしく「え、夜は立入禁止だよ？」と何度もたずねたが、禁止されたら行きたくなるのがオトコだ。

ぼくが意外と乗り気なのを見て安心したらしいユウは「今日が七月一日だから……行くなら七夕がいいかな。天の川が見えるかも」とトントン拍子に計画は決まった。

楽しみだな！　そう言って笑うとユウはうれしそうに大きくうなずいたのだった。

とうとう七夕になった。今日のぼくはずっとソワソワしていたようでいろんな人に「どうしたんだ？」と心配された。

問題はどうやって家を出るかだ。まず集合が午後七時の時点であやしまれる。まあこの計画を立てた時からおこられることは決まっているので、もうこわいものはないも同然だ。

だからぼくは正面とっぱを決めこんだ。

「母ちゃん！　今から星を見に行ってくる！」

「はァ!?　星って……ちょっと待ちなさい！　アンタ今何時だと思ってるの!?」

台所からの母ちゃんの叫び声を背に、ぼくは街灯に照らされた通学路へ飛び出した。

「翔太くん！　こっち！」

校門に着いた時、ユウはぼくをすでに着いていた。

「ごめんっ待たせた？」

「ううん、大丈夫！　さっそく行こう！」

どうやらユウはテンションが高いらしい。いつもより少し早い会話にぼくは心がほっこりした。

合流して十分、それはとつぜん訪(おとず)れた。

「翔太くん、スマホからなにか通知の音がするよ？」

「あれ、本当だ。なんだろ」
ここでぼくは最大のミスに気が付いた。
「ユウ！　ヤバイかも!!」
「えっ!?　どうして!?」
ぼくのスマホはでんげんがついている限り、母ちゃんと父ちゃんにぼくのいる場所が分かるようになっている。スマホの通知がとどくということは、今ぼくのスマホのでんげんがついている。ぼくらの場所は母ちゃんにばれているのだ。つまり。
「母ちゃんが……ここに来る!!」
ヤバイ、これは本当にヤバイ。下手したら星を見ることなく家に連れもどされる。
「とっ、とりあえずでんげんを消そう！　それで丘まで走……」
ユウの声が不自然に止まった。ぼくの後ろを見て青ざめている。ぼくもとてもいやな気配を感じている。おそるおそるふり返ると。
「翔太――!!」
ものすごい顔で走ってくる母ちゃんがいた。
「うわあああああああ!!」
ぼくが思わず叫んでしまうほどにその顔はこわかったのである。
「翔太くん!!　とりあえずお母さんからにげよう!!」
「いや、にげるしかないでしょ!?」

でんげんを切りながらにげ続ける。母ちゃんはぼくの名前を呼びながらせまってくる。ふりきるために丘のてっぺんについた時にはもうヘトヘトだった。

「つ、ついた……!」

ぼくらはたどり着くなり草原のうえにあおむけにたおれこんだ。つかれた。あまりにもつかれた。このままここで眠ってしまいそう。

そんなぼくとは反対に、ユウは目をキラキラさせて夜空を見上げていた。ぼくもユウにならって夜空に目をやるとその美しさに息をのんだ。

雲一つない夜空と無数の星。その中に静かに流れる天の川。ぼくが今までに見たどんな夜空よりもきれいだった。

「ねえ、翔太くん」

「んー？　どうした？」

「今日学校で書いた七夕の短冊になんて書いた？」

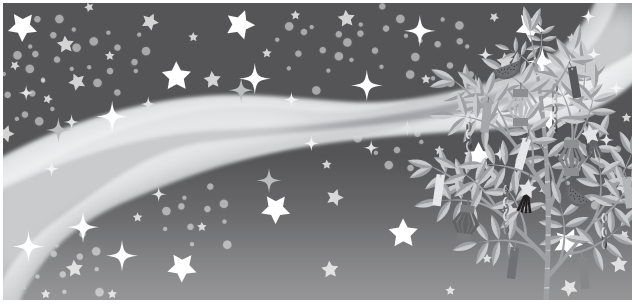
たしか願い事って人に言うと叶わなくなるのでは？　と言うとユウは「ひみつにするから大丈夫！」と笑った。全く大丈夫ではないと思うけどぼくは「もっといっぱい遊びたいって書いた」と答えた。

すると、ユウは失礼なことに「ぷっ」と吹き出した。

「失礼だな！　別にいいだろ!?」

「っふふ、ごめん翔太くんらしくて、つい」

「そういうユウはなんて書いたの」

ぼくがふてくされながら聞き返すと、ユウはこう答えた。
「もっとふつうに人と話せますようにって書いた」
思わぬ答えにぼくはびっくりした。それと、ユウはぼくとふつうに話している。なにがふつうではないのだろう。そんなぼくの考えを見すかしたように彼はこう言った。
「ぼくは人見知りだと思われてるけど、それはちがうんだ。人と話す時、なにを言うのがせいかいなのか、まちがいなのか。考えてるうちになにを話せばいいのか分かんなくなって……結局、何も言えなくなるだけなんだ」
「だから、『ふつうに話せますように』？」
ユウは静かにうなずいた。
正直な話、「なやんだところでかいけつしないこと」だと思った。にんげんなのだからせいかいもなにもない。だからぼくは
「人がなに考えてるかなんて分かるわけないじゃない」と言ってやった。
ユウはポカンとした顔をしている。とても面白い。
「だから、そんな細かい事をなんて考えずに話せばいいよ。まちがえたってあやまればいいだろ」
なんだか、すごくかっこいいことを言った気がする。さすがぼく！　と思っていると向こうから数人の足音と共におにのような顔をした母ちゃんがやってくるのが見えた。ぼくらは思わず顔をひきつらせた。
「翔太くん、あれヤバイよね……？」
「今までで一番ヤバイかも……」
予想通り、ぼくは母ちゃんから大目玉とゲンコツをくらった。その時のタンコブは一週間もぼくの頭にのこっ

たが、ユウとのスリル満点の星めぐりはとても楽しかった。
星めぐりの夜は金曜日だった。いつもなら土日はゲームについやしているが、当然、この土日は母ちゃんの説教でつぶれた。今回ばかりはどうしようもない。
そんな気まずい土日を終えて、月曜日。ぼくはいつものように大きな音を立てて教室のドアを開け放つ。
「おっはよー!!」
「翔太おはよー!」クラスメイトが口々にへんじをする。いつも通りの良い朝だが。
「あれ、ユウはまだ来てないんだ」
いつもぼくより早く登校するはずなのにまだ来ていないようだ。少し意外に思っていると豪と広志がこちらへやってきた。
「翔太――! お前、夜に光川丘行って怒られたんだって?」
一体どこから聞いたのだろうか、豪はおれも行きたかった! とすね始めた。これはなだめるのがめんどうだな、と思ったその時だった。
「おっ……おはよう!」
教室のドアからはっきりと大きな声でユウがあいさつをしたのは。
教室中がおどろきのあまり、静まり返る。ユウは今まで返事すらままならなかったのだ。
しかしそれも一瞬のことだった。すぐにみんな「おはよう!」と笑顔を返した。
いそいそとユウが席に着く。すかさずぼくは「おはよ!」とニヤッと笑いかけた。
すると窓ぎわの友達は今までで一番の笑顔を咲かせたのだった。